



2025  
No.  
**140**

企画展 湖西の神仏

P1～P3

コラム 調査報告書『石山寺の彫刻』

P4～P5 編集中です

収蔵品紹介 びわこ国体の法被

P6



大津市歴史博物館

令和7年12月5日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

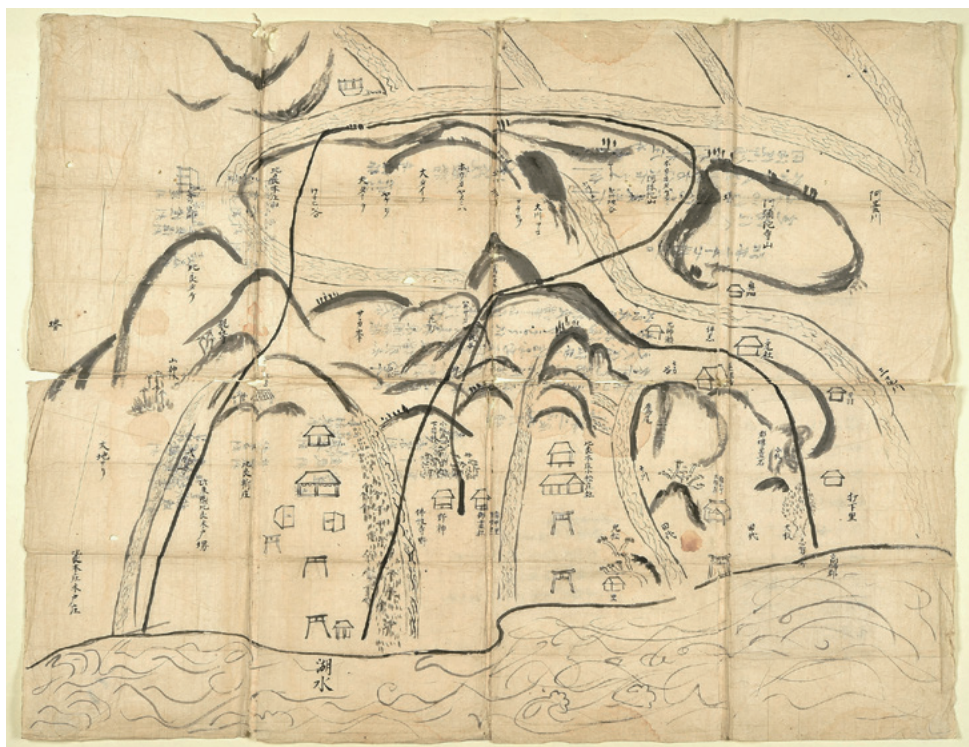
TEL(077)521-2100

<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

志賀町合併20周年記念企画展（第99回企画展）

## 湖西の神仏

会期：令和8年3月7日(土)～4月19日(日)



【写真1】近江国比良庄絵図 江戸時代 南比良共有財産管理委員会蔵

### 「湖西」ってどこ？

大津市に縁のある方にとって、「湖西」という言葉はとてなじみのあるものでしょう。ところが、どの地域が湖西なのかと聞かれると、人によってかなりの幅があります。ある人は「琵琶湖の西側のことだよ!」と、答えてくれるかもしれません。でも、「大津市の北部と高島市のことを指すんだよ」と、もうすこし狭い範囲を具体的にイメージしている人もいることでしょう。

実は、どちらの答えも誤りではありません。「湖西」には、現在の市域、町域を超えたつながりがあるので、様々な答えがありうるのです。

では、企画展「湖西の神仏」でご紹介するのはどの地域の神仏でしょうか。令和8年(2026)は、平成18年(2006)3月20日に志賀町と大津市が合併してから20周年の節目の年にあたります。そこで、本展では、旧志賀町域を中心に、周辺の<sup>かつらがわ</sup>大津市葛川や高島市も含めながら、「湖西」の仏像・神像・仏画・絵巻・聖教類などを展示します。

## 旧志賀町の宗教文化

旧志賀町は、大津市の北部に位置し南北約16キロメートル、東西約7キロメートルの細長い町域で、西側に比良山系、東側に琵琶湖を有する豊かな自然を背景に、古くから特色ある宗教文化が育まれてきました。それを代表するキーワードのひとつが「比良三千坊」です。これは、平安時代に比叡山延暦寺が開かれて以来、比良山系とその山麓で建立された多数の天台寺院を一括し、象徴的に言い表したものです。かつての「比良三千坊」を受け継ぐとの伝承を持つ寺院が旧志賀町域に多いことは、この地域における天台宗の影響力の大きさを物語っています。しかし、いずれの伝承も史料的な根拠があるわけではなく、確実に「比良三千坊」を継承しているといえる寺院はありません。このように、「比良三千坊」の実態をつかむことはとても難しいのが現状です。

ところが、近年、「比良三千坊」の具体的な姿を今に伝える文化財が少しずつ確認されています。今回の歴博だよりでは、本展で展示予定の作品を中心に、「比良三千坊」にかかわる文化財を紹介します。

## 「比良三千坊」の世界

「比良三千坊」を語るうえで欠かせないのが、「近江国比良庄絵図」です。これは、木戸以北の旧志賀町域と、大津市葛川、高島鷯川周辺の景観を描いた絵図で、寺の堂宇や神社の社殿、鳥居などが描かれ、その宗教空間を今に伝える貴重な情報を含んでいます。鎌倉時代後期に制作された原図（現存せず）を後に写したものが3件残っており、なかでも文字情報が豊富なのが江戸時代に制作された【写真1】南比良共有財産管理委員会所蔵の絵図です。「白ヒケ大明神」など、現代まで残る寺社名のほか、「法花寺」など、後世「比良三千坊」という言葉で象徴されるようになる廃絶寺院の名も窺い知ることができます。

## 「比良三千坊」の痕跡を追って — ①北小松・徳勝寺薬師堂 —

これまで「比良三千坊」は、「近江国比良庄絵図」に加え、古代寺院の発掘や現代に残る伝承などから存在が捉えられてきました。さらに、当館による最近の調査で、こうした天台寺院に安置されていた可能性が高い仏像を確認でき、より詳しくその実態を想定できるようになりました。それが、北小松・徳勝寺の門前に所在し、「比良三千坊」のひとつを継承するという伝承を持つ薬師堂の仏像です。



【写真2】薬師如来坐像 平安時代 徳勝寺薬師堂蔵



【写真3】不動明王立像  
南北朝時代 徳勝寺薬師堂蔵

【写真4】  
同光背裏銘文 赤外線写真

現在、薬師堂には【写真2】薬師如来坐像（平安時代）、【写真3】不動明王立像（南北朝時代）をはじめ、計6軀の彫像が残っています。

そのうち、不動明王立像の光背裏の銘文【写真4】には、結縁した人々の滅罪と極楽往生などを願い、至徳元年（1384）に壱岐入道（仏師か）と観恵（願主か）が不動明王像を修理したと記されています。薬師堂の裏山には、至徳5年の日付を有する観恵の墓があり、北小松には観恵が住む寺院があったと思われます。また、銘文には不動明王と合わせて「本尊薬師如来」「地藏菩薩」も修理したと記され、「本尊薬師如来」は【写真2】薬師如来坐像に相当するものと想定できます。

これらのことから、薬師堂の諸仏を安置する寺院が、遅くとも南北朝時代には北小松にあったと捉えられます。薬師堂は寺伝にあるとおり「比良三千坊」を継ぎ、薬師堂の諸像がその旧仏であった可能性が高いと考えられるのです。

さらに、薬師如来坐像は等身大、不動明王立像は像高98.1センチメートルで、比較的大型の仏像です。安置されていた堂宇も一定の規模を有していたと想定され、「比良三千坊」の具体的な様相を知ることができる貴重な作例といえます。

### 「比良三千坊」の痕跡を追って — ②和邇中・薬師堂 —

このほか、和邇中<sup>わになか</sup>・天皇神社の裏手に位置する薬師堂の本尊として安置される【写真5】薬師如来坐像も、「比良三千坊」と関わる可能性がある仏像です。

本像は、像高が171センチメートルの大きな像で、これまでは江戸時代の作とされてきました。江戸時代の仏像は木材を無駄なく効率的に使用し、比較的軽いという特徴があるので、最近調査させていただいた際も「大きい像とはいえ、たぶんそこまで重くはないだろう」という気持ちでいました。ところが、像を持ち上げたところ、あまりにも重かったため、結局学芸員6人がかりで動かすことになりました。そして、須弥壇<sup>しゆみだん</sup>から降ろし、頭部を外してみたところ、胸や腹を含む体幹部の正面側が、幅1.1メートルにもなる広葉樹の一木で作られていることが分かった

のです。しかも、この広葉樹材にはところどころ黒焦げになった部分があり、安置されていた堂宇の火災などによって焼損したものと考えられました。

1メートルを超える大きな木材を使い、頭部と体部をともに造り出す技法は、鎌倉時代以前に多く、この体幹部の正面側は、少なくとも鎌倉時代以前にさかのぼるものと思わ

れます。それ以外の頭部や脚部、体幹部の後ろ側などは、ヒノキと思われる針葉樹材を使用して江戸時代に修理されたものです。焼損した仏像を全く新しく造り替えるのではなく、できる限り活かそうとする姿勢が見て取れます。

実は、本像はもともと天皇神社境内にあった薬師堂に安置されていたもので、明治になってから堂宇ごと境外へ移されました。つまり、天皇神社の神様の本地仏<sup>ほんじぶつ</sup>だったのです。もとの像を大切に修理した要因は神様に関わる仏像だったことにあるとも想像されます。

しかし、本像は天皇神社に祀られる男神像（平安時代・像高73.6センチメートル）に比べてかなり大きいので、当初からの本地仏ではない可能性も残ります。天皇神社の周辺の和邇や栗原には、大教寺野遺跡などの古代寺院遺跡があり、観音寺や舜楽寺といった天台寺院の存在も文書から確認できます。こうした寺院に本像が安置されていたとも想像され、「比良三千坊」の遺風を本像から窺うことができるかもしれません。

伝承の中に埋もれ、その姿を追うことはとても難しい「比良三千坊」。しかし、丹念に旧志賀町の文化財を調べていくと、少しずつではありますが、実態をつかむヒントが見えてきました。今回ご紹介した調査成果も踏まえながら、本展では「比良三千坊」の様相をできるかぎり復元して展示する予定です。ぜひ歴博へお越しいただき、かつて比良山麓で栄えた宗教文化に触れていただきたいと思います。

（学芸員 柘植健生）



【写真6】同首柄裏側



【写真5】薬師如来坐像 薬師堂蔵

## 調査報告書『石山寺の彫刻』編集中です

大津市歴史博物館では、令和4年度より大津市内の寺社に所在する未指定文化財の調査を始め、その成果を「大津市歴史博物館調査報告書」として刊行しています。昨年度は『大津の彫刻1』と題して、市内に所在する11件の彫刻を報告しました。なお、この報告書は非売品ですが、当館および市立図書館、県立図書館などで閲覧が可能です。今年度からは『石山寺の彫刻(仮称)』の編集に着手し、2年間にわたって報告書を刊行する予定で調査を継続しています。

今回のたよりでは、その報告書のうちの1冊を占める予定の「三十三応現身像」【写真1】についてご紹介したいと思います。



【写真1】三十三応現身像(石山寺蔵)

### 多数尊とその調査

「多数尊」という言葉を聞かれたことがあるでしょうか。定義の仕方はいろいろありますが、ここでは「複数の尊像(仏像)により構成され、その集団が固有の名称で呼ばれる群像」と考えたいと思います。実例を挙げると仁王(二王)、四天王、五大明王、六観音、八部衆、十大弟子、十二天、十二神将、十三仏、十六羅漢、二十八部衆…など実に多様で、最初の数字が構成する尊像の数を表している場合が多いです。四天王を構成する尊像は持国天、增長天、多聞天、広目天の4体で、五大明王であれば5体、十二神将であれば12体、二十八部衆であれば28体で構成されます。

このような多数尊の調査、特に彫刻の調査においては、いくつか困ったことが発生する場合があります。そのうちの1つが、「個別の尊像の名称」の特定が困難な場合があることです。例えば仁王像であれば口を開けている方を

阿形、閉じている方を吽形と呼びますし、四天王であれば体勢や持ち物、体の色などで判断できることが多いです。ところが、構成する尊像が多くなればなるほど特定は簡単ではなく、例えば十二神将の場合は、宮毘羅、伐折羅、迷企羅…といった名前の12体の武装した神将像で構成されますが、その姿については経典などで明確に決められているわけではありません。平安時代以降には十二支と習合したことで、頭頂などに十二支獣の頭を表す例が増加し、子神、丑神、寅神など十二支によって呼ぶ場合もありますが、これらの十二支頭は作り直されたり、失われたりすることも少なくありません。その場合はお寺に伝わっている名称(寺伝名称)をあてますが、寺伝名称も不明の場合などは、1号像、2号像、3号像といったように番号で仮称するしかないこともあります。さらに多数尊の場合は、構成する尊像の一部が失われている場合もあるので、個々の尊名を特定するのは簡単なことではありません。

### 三十三応現身とは

本題の三十三応現身は、名前の通り33体もの尊像で構成される多数尊です。その典拠は、『妙法蓮華経』(『法華経』)のうち、特に観音菩薩について説く「観世音菩薩普門品」(普門品、別名『観音経』)が著名です。「普門品」は世尊(釈尊)との対話を通して、観音菩薩の功德や利益を説明する形で進行します。その中で「観世音菩薩は現世において、どのように衆生に教えを説くのか」という問いに対し、世尊が「得度すべき者に応じて、それぞれの姿に変わって法を説く」と答える形で33の姿が登場しています。変化する姿(変化身)を列挙すると、①仏、②辟支仏、③聲聞、④梵王、⑤帝釈、⑥自在天、⑦大自在天、⑧天大將軍、⑨毘沙門、⑩小王、⑪長者、⑫居士、⑬宰官、⑭婆羅門、⑮比丘、⑯比丘尼、⑰優婆塞、⑱優婆夷、⑲長者婦女、⑳居士婦女、㉑宰官婦女、㉒婆羅門婦女、㉓童男、㉔童女、㉕天、㉖龍、㉗夜叉、㉘乾闥婆、㉙阿修羅、㉚迦楼羅、㉛緊那羅、㉜摩睺羅伽、㉝執金剛の33となります。つまり三十三応現身とは、観音菩薩が救済しようとする様々な人々に応じて変化する33の姿のことであり、人々の立場に応じて様々な救済を行う観音菩薩の万能の力を現したものとと言えます。

ところが、「普門品」では変化身の名を列挙するものの、どのような姿かたちをしているのについては言及がありません。それぞれの名前を見ても、「帝釈」や「毘沙門」、「阿修羅」、「迦楼羅」など、よく知られたものもありますが、「辟支仏」や「天大將軍」、「宰官」、「長者婦女」以降の婦女身など、仏像や仏画においてなかなか見ることのない名前も含まれています。このように個々の像がどのような姿をしているのか明確な決まりがないことは、仏像や仏画として造形することを難しくしていたと思われ、実際に三十三応現身を造形した作例はそれほど多くありません。

### 石山寺の三十三応現身像

それでは、石山寺の三十三応現身像をみていきましょう。本像は、石山寺の本堂、秘仏本尊が安置される<sup>くうてん</sup>宮殿の両脇に配置されており、全部で34体あります。三十三応現身の数より1体多いですが、どうやら後の時代に別の像が1体加えられたようです。その像を除くと、全体の作風はよく揃っており、同時期にまとめて制作されたとみられます。33体すべてが現存する貴重な例なのですが、個別の像の名称はというと残念ながらよくわかりません。調査をする中で、像内や像底、<sup>ぞうてい</sup>台座の裏などに墨書による尊名が書き込まれている像があることがわかってきましたが、全部の像にあるわけではなく、また像内はともかく像底や台座に書かれた文字は、後から書き込まれた可能性もあります。加えて台座は後の時代に像の間で入れ替わったものもあるようなので、墨書の内容をすべて信用することはできません。最終的には、他に三十三応現身を表した彫刻や絵画の作例と比較しながら、個々の尊像の

特徴などを見極めていくしかないのです。

ここで、石山寺の三十三応現身像について、一部ながら尊名の特定を試みてみましょう。石山寺像には4体の僧侶の姿をした像があります【写真2～5】。他の三十三応現身の作例を確認すると、辟支仏・聲聞・比丘・比丘尼の4体が僧の姿で表されることが多いので、石山寺像もこの4体に該当すると思われます。更に区別しようとすると、写真2・3の像と、写真4・5の像では、服装が異なることに気がつきます。写真4・5の像が、袖付きの法衣に<sup>くん</sup>裙(下半身に着ける巻きスカート状の衣)、袈裟を着けるのに対し、写真2・3の像は袖付きの法衣を着けず、代わりに背中から右肩にかけてを覆う<sup>ふっけんえ</sup>覆肩衣という衣を着けています。これは、阿弥陀如来や地藏菩薩といった仏像がする着衣に近いものです。先に挙げた4体は、辟支仏が「自然現象などから師なくして独自に悟りに至るもの」、聲聞が「仏の説法を聞いて自己のために悟りを開こうとするもの」を意味し、比丘と比丘尼は男女の出家修行者のことですから、辟支仏と聲聞の方が、より仏に近い存在と考えられます。その区別のために、着衣の付け方に差をつけているのではないのでしょうか。つまり写真2・3が辟支仏および聲聞で、写真4・5が比丘と比丘尼を表したものではないかと考えられるのです。ではそれぞれがどの尊名に該当するのかというと、明確な根拠があるわけではないのですが、個人的には写真2が辟支仏で写真3が聲聞、写真4が比丘で写真5が比丘尼と考えています。報告書刊行までに全ての尊名が特定できるかはわかりませんが、このようなことを考えながら、調査を継続しています。(学芸員 赤津將之)



【写真2】



【写真3】



【写真4】



【写真5】

## びわこ国体の法被 昭和 50 年代 本館蔵

今年、滋賀県で44年ぶりに行われた「わた SHIGA 輝く国スポ・障スポ」は、無事に閉幕しました。大会は都道府県の持ち回りで毎年開催されるもので、滋賀での前回大会は昭和56年(1981)9月から10月に、第36回国民体育大会(びわこ国体)と第17回全国身体障害者スポーツ大会(びわこ大会)として開催されました。前回大会では、大津市を主会場として開会式・閉会式が行われるとともに、国体は公開競技などを含む11競技、障害者スポーツ大会は7競技が行なわれ、全国から集まった選手を市民総出でお迎えしました。

当館では、本年4月22日から7月13日まで、ロビー展「44年前のびわこ国体」を開催、前回大会の式典や各会場の様子を伝える写真をはじめ、ポスターや記念品など、ゆかりの品を紹介しました。展示のなかでも関心が高かったのは、大画面で上映した映画「湖は炎と燃えて」でした。この映像は、開催中の様子だけでなく、市民の歓迎準備や京阪浜大津駅(びわ湖浜大津駅)の整備など、大津市での大会に向けた取り組みも記録されています。観覧された方々は、当時の大会の盛り上がりや、変わりゆく街の姿を興味深く見ておられました。ちなみに、同映画は本館ロビーのビデオライブラリーで、いつでも視聴できます。

今回ご紹介する収蔵品は、ロビー展開催中に寄贈のご相談を受け、新たに収蔵した資料です。この資料は、写真のような法被で、「びわこ国体」と「大津市」のプリントがある以外は、祭礼やイベントで着用する一般的なものです。

これは、昭和56年開催のびわこ国体に中国体育協会の来賓として招待された、夏翔氏(1903~1991)が保管していた法被です。夏翔氏は、棒高跳びの選手で、アメリカの大学へ留学後、北京の清華大学でスポーツ教師となり、中国オリンピック委員会の副主席をつとめた人物です。びわこ国体には、中国体育総会の副主席として来津され、開会式にも参加されました。法被はこの際に大津市から夏氏にプレゼントされたものです。

『第36回国民体育大会報告書』(大津市実行委員会、1982年)によれば、当時、特別接伴として、海外から中国体育総会と、本市と姉妹提携を結んだスイス・

インターラーケン市の方々が来られ、そのうち中国体育協会からは、10月9日から15日まで、5名の方が開会式を中心に国体を視察されたと記録されています。

今回の寄贈は夏氏からではなく、現在滋賀県内に勤務されている個人からお申し出を受けました。その方は中国の方で、郷里が夏翔氏と同じだったことがきっかけで、娘さんと滋賀の話題になり、夏氏が大切に保管していたゆかりの品として、法被を譲り受けることになったそうです。娘さんの話では、夏翔氏は滋賀での思い出について、琵琶湖が美しかったことを語っておられたといいます。また、寄贈者からは、先述の記録映画の入場式の場面に夏翔氏が写っている(法被は着ておられませんでした…)ということも教えていただきました。

今回、ロビー展に展示した資料のほとんどは、当時の市の大会担当部署が保存したのですが、ポスターや開会式の集団演技のユニフォームなどは、当時の大会関係者や開会式の参加者から、博物館にご提供いただいたものです。

博物館に寄贈される資料のなかでも、近現代の歴史資料は使用された方や集められた方のエピソードや思いが込められています。今回は、遠く中国の地で大切にされていたびわこ国体ゆかりの法被が、ご縁があって博物館に収蔵されることになりました。次回の国スポ・障スポは40年以上の先のことになるかもしれませんが、その際に展示できるよう、エピソードとともに保管したいと思います。(副館長 木津勝)



びわこ国体法被 昭和 50 年代 本館蔵